もっと

もっと利用したいね。青年教育センター

年間利用者は約6万3千人

昭和四十四年、全国三カ所に都市型青少年研修施設としてモデル的に建設された青年教育センター。建設当時は経済の高度成長期で、青少年教育の重要性が叫ばれていました。また、農業後継者の急激な減少から、その対策が求められていた時期でもありました。そこで、青少年と農業後継者の教育施設として建設されたのが青年教育センターなのです。

以来、青年教育センターは青年たちの学びの場、集いの場として活用されてきました。これまでの年平均利用者数は約六万三千人。平成二年度の利用者数は六万八千九百三十四人でした。県内にある他の青少年研修施設と比較しても、これは大変多い数字です。

減少する青年の利用

毎年平均した利用のある青年教育センターですが、その内訳は時代の流れとともに変化してきています。一般利用者数が増える一方で、青年を対象にしたセンター主催事業の利用者数は減少。青年団体の利用も減っています。

これは青年の意識が多様化、分散化して、組織化が難しくなっているためです。また、農業に農閑期がなくなったことも大きな原因となっています。農業経営の複合化は通年就農という形態を生みました。さらに農閑期には勤めに出る青年がほとんど。青年がセンターを利用するのは夜と日曜日に集中します。

青年教育センターでは利用状況について「平成二年にカルチャーセンターが完成したにもかかわらず、青年教育センターの利用は減っていない。これは裏を返せば、利用者が固定化してきている現れ」と分析しています。固定化とは、利用者の多くが以前から足を運んでいる人で、新規利用者の割合が少ない状態。青年層の新規利用者の拡大が、これからの課題といえそうです。

仲間づくりより学習中心

青年教育センターのメインとなる事業は青年スクールです。青年スクールは学びながら仲間づくりをする場として、昭和五十八年から開設されています。茶道や華道に加え、最近はワープロも人気のある講座です。最近の青年の傾向は「仲間づくりよりも学習中心」と青年教育センター。極端な場合、学習が終わると会話を楽しむでもなく、さっさと帰ってしまう人も少なくないとか。

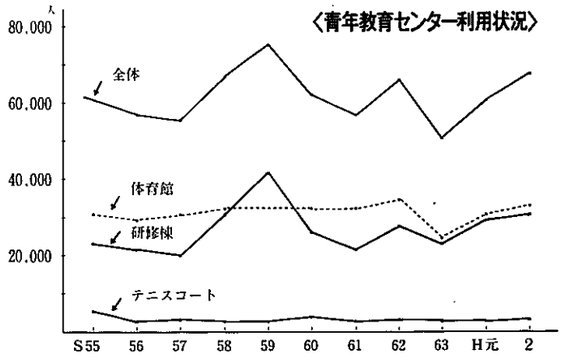
学習だけではなく、仲間づくりも目標の一つに掲げている青年スクール。しかし一昔前とは随分違った雰囲気のようです。現代青年の気質を把握するのに四苦八苦というのが、担当者の正直な気持ちといったところ。

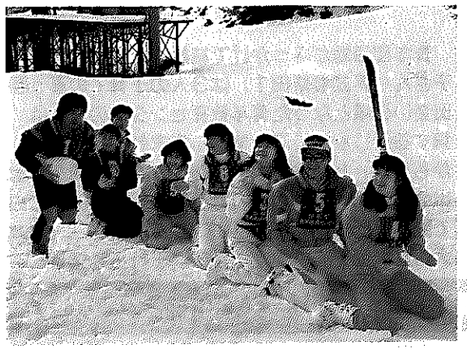
今も昔も変わらないのは青年教育センターが若者の出会いの場になるという点です。ここでの出会いが縁でゴールインしたカップルは数え切れないほど。開所して二十三年が過ぎた青年教育センターは、二世が利用する時代になりました。

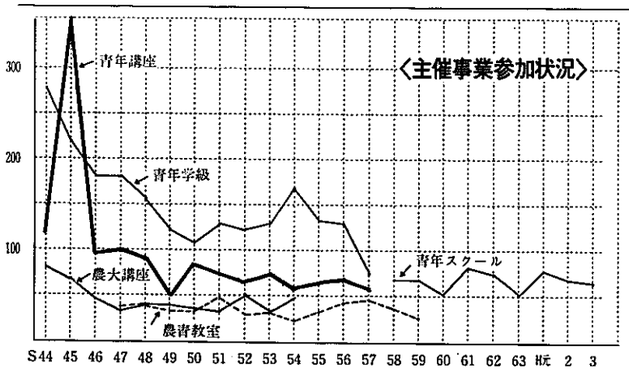
身近で無料器具も貸し出し

青年の館として建設された青年教育センターですが、時代の流れとともにその性格は徐々に変わりつつあります。青年の利用が減り、一般利用者が増加しているという現実。生涯学習の必要性が叫ばれる中で、青年教育センターは気軽に、しかも無料で利用できる生涯学習の場として、市民に定着しているようです。青年教育センターを利用する人の多くが、その良さを次のように話します。「身近で、無料で使え、さまざまな器具がそろっている。そして、たくさんの出会いが待っている」と。

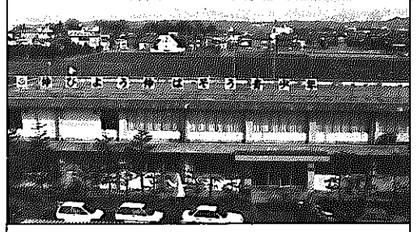
今の青年だけではなく、昔の青年も、これからの青年も、みんなが利用できる青年教育センター。あなたもぜひ一度足を運んでみてください。きっと素晴らしい出会いが待っています。







青年教育センター（☎373-2800）



〔利用方法〕

□利用できる人　市内に在住・勤務する人ならどなたでも。ただし青少年・青年団体とその関係機関・団体を優先します。個人利用は体育館とテニスコートに限ります

□利用時間　午前9時～午後10時（ただし12月～2月は午後9時30分まで）

□休所日　毎月第1月曜日と年末年始

□利用料金　無料

□利用申し込み　〔団体・機関〕利用日の5日前までに申込書を提出してください

〔個人〕利用の際に受付を

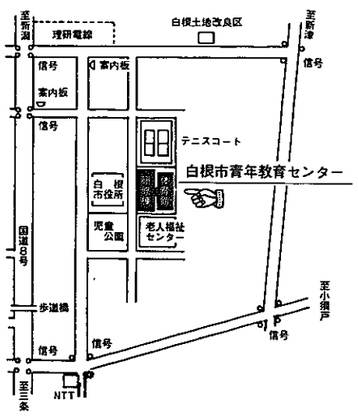
□宿泊研修　青年教育センターは宿泊研修も可能。寝具、食事などは主催者が準備を。事前に打ち合わせが必要です

〔施設案内〕

□研修棟1階　第1研修室、音楽室、食堂（定員各50人）、調理室（定員30人）

□研修棟2階　視聴覚室（定員100人）、第2研修室（定員10人）、第3～5研修室（定員各20人）、第6研修室（定員90人）

□体育施設　体育館、テニスコート2面

□設備・器具　音楽レクリエーション用器具、体育用器具、視聴覚用器具など

〔交通案内〕